

フェヒナーからフロイトへ(2) : グスタフ・テオ ドール・フェヒナーの系譜(7)

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1500407>

出版情報 : 言語文化論究. 34, pp.1-20, 2015-03-20. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :



フェヒナーからフロイトへ (2)

——グスタフ・テオドール・フェヒナーの系譜 (7)——

福 元 圭 太

はじめに

前稿¹において筆者は、フェヒナーがフロイトに与えた影響に関する先行研究を批判的に検討し、主としてブグレ／ヴィルトゲンの論文²に基づいて、まずはこの両者の伝記的な共通性を点描した。それに続く本稿の目的は、フェヒナーの思想がフロイトの個々の学説にどのような影響を与えているのかという、前稿では立ち入ることのできなかった問題を解明することにある。本稿もまたブグレ／ヴィルトゲンの論文に多くを負っている。³

1. 「メタ心理学」

フェヒナーがフロイトに与えた影響の多くは、いわゆる「メタ心理学」の領域において見られる。ただしこの「メタ心理学」という概念そのものは多義的なので、フロイトの言うそれが何を意味しているのかを限定しておかなくてはならない。

一般的に用いられる術語としての「メタ心理学」は、時として「超心理学」(Parapsychologie ないし Transzendent-Psychologie)、つまり、通常の心理学を超えるテレパシー (Telepathie)、予知 (Hellsehen) や透視 (Clairvoyance)、空中浮遊 (Levitation)、心霊現象 (Spuk)、あるいは霊媒によって幻姿を呼び出すこと (Apport) 等々を研究の対象とする心理学を意味することもある。⁴ たしかにフロイトはこのようなオカルトに近い領域にも興味をもち、1920年代には特にテレパシー現象に関する論文を書いているが、⁵ フロイトの言う「メタ心理学」は、この意味における「メタ心理学」とは異なる。

フロイトはそのごく初期に、「メタ心理学」を「無意識の心理学」(Psychologie des Unbewußten) という意味で使用した。1898年⁶ 3月10日付フリース宛ての書簡で、フロイトは次のように尋ねている。

ところで僕は君に真剣に尋ねたいのだが、意識の背後へと通じている私の心理学を、メタ心理学と呼んでもよいものだろうか。

Ich werde Dich übrigens ernstlich fragen, ob ich für meine hinter das Bewußtsein führende Psychologie den Namen Metapsychologie gebrauchen darf. (*Aus den Anfängen*; ⁷S. 211)

フロイトはその後、「メタ心理学」を「精神分析に関する理論」(Theorie der Psychoanalyse) という意味で使用するようになる。これが現在フロイトの「メタ心理学」と言われるものに他ならない。

「夢の学説のメタ心理学的補遺」という論文の注に、フロイトは次のように記している。

このシリーズの目的は、精神分析のシステムの基盤を形成できるような理論的仮説の解明と深化にある。

Absicht dieser Reihe ist die Klärung und Vertiefung der theoretischen Annahmen, die man einem psychoanalytischen System zu Grunde legen könnte. („Metapsychologische Ergänzung zur Traumlehre“. 1916. GW-X,⁸ S. 412. Anm. 1)

フロイトは上記論文の前年にも、論文「無意識」において、術語「メタ心理学」を以下のように用いていた。

心的な過程をその力動的、局所論的、ならびに経済論的諸関係の観点から記述することに我々が成功するとすれば、それはメタ心理学的叙述と呼ばれるべきであるというのが、私の提案である。

Ich schlage vor, daß es eine *metapsychologische* Darstellung genannt werden soll, wenn es uns gelingt, einen psychischen Vorgang nach seinen *dynamischen*, *topischen* und *ökonomischen* Beziehungen zu beschreiben. („Das Unbewußte“. 1915. GW-X, S. 280f.)

ここで重要なことは、心理学の理論である「メタ心理学」は、3つの観点から記述されるということである。すなわち、力動的、局所論的、経済論的な観点である。

以下ではこの3つの観点それぞれについて、フェヒナーがフロイトに与えた影響を分析する。ただし、経済論的観点については、次稿に譲る。

2. 力動的観点

力動的(dynamisch)な観点とは、心的現象がさまざまな力の葛藤から生じていると捉える考え方を指す。そのさまざまな力の源泉こそが欲動(Trieb)と呼ばれるものである。欲動は意識・無意識の区別以前のところにあるが(たとえば生体が緊張を緩和しようとする欲動や自己保存の欲動等)、もっぱら問題になるのは、無意識的な欲動である。「我々が視野に入れることができるのは、ただその表象代表が無意識であるような欲動の動きである。というのも、それ以外のものは、何ら問題とならないからである」(Wir können nichts anderes meinen als eine Triebregung, deren Vorstellungsrepräsentanz unbewußt ist, denn etwas anderes kommt nicht in Betracht.) („Das Unbewußte“. 1915. GW-X, S. 276)。力動的な観点とはすなわち、無意識的な欲動が心的現象に作用し、それを決定する力をもっている、と主張する観点であると言える。無意識という領域の存在を承認し、そこにある欲動が心的現象、つまり精神生活のみならず、日常的な活動にとって決定的な作用を及ぼしているという主張こそが、深層心理学の基本的なスタンスなのである。フロイトは講演「精神分析について」で次のように語っている。

知性の側が精神分析的な思考過程の承認をためらうもっともな理由は、特に以下の2つの障害にあると思われます。第一に、精神生活が、厳密で例外なしに妥当する決定性のもとにあると考えることに、知性が慣れていないという障害、第二に、我々がよく知っている意識的なそれ

とは異なる、無意識的な心的過程の独特さを、知性は知らないという障害です。

Ich meine, es sind von der Seite des Intellekts besonders zwei Hindernisse gegen die Anerkennung der psychoanalytischen Gedankengänge zu würdigen: erstens die Ungewohnheit, mit der strengen und ausnahmslos geltenden Determinierung des seelischen Lebens zu rechnen, und zweitens die Unkenntnis der Eigentümlichkeiten, durch welche sich unbewußte seelische Vorgänge von den uns vertrauten bewußten unterscheiden. („Über Psychoanalyse“. 1910. GW-VIII, S. 56) (講演は1909年に行われた)

さて、フェヒナーもまた、無意識の存在を確信していた。フェヒナーにとって無意識は、感覚として意識される最低限の閾値の下にある、意識にはのぼらないものの確実に連続しているはずの精神物理的活動の謂いである。⁹ フェヒナーもまたフロイト同様、無意識が意識を規定するという決定論的な立場を取る。フェヒナーの場合決定論は、心理的なものと物理的なものの表裏一体性に関する学説、つまりは「精神物理学」の研究から導出されたものである。

物理学者フェヒナーは、現象界のすべてには、物理的な（フェヒナーの場合「物理的」の中に「化学的」なものも含まれている）基盤があるとした。¹⁰ 精神的なものも物理的基盤をもっている、すなわち物理的なものと精神的なものはひとつのコインの表と裏のように、表裏一体であるとフェヒナーは考えるのである。物理的なものは、厳密な法則性のもとにある。物理的なものが物理法則という決定論下にあり、物理的なものと精神的なものが表裏一体であるとすれば、三段論法上当然のことながら、精神的なものも厳密な法則性の支配下に、つまりは決定論のもとにあると考えられるのである。ヴントはフェヒナーが「あらゆる科学的認識の前提条件として、現象世界の厳密な法則性を強く確信していたので、人間の意志もまたこの法則性を免れえない […]」(von der strengen Gesetzmäßigkeit der Erscheinungswelt, als der Vorbedingung jeder wissenschaftlichen Erkenntnis, so fest überzeugt war, dass er auch den menschlichen Willen von dieser Gesetzmäßigkeit nicht ausnahm, [...]) (Gustav Theodor Fechner; S. 17) と考えていたことを伝えている。

「自由意思」という哲学上の大問題に関するフェヒナーの立場は明快である。意志の背後に物理的基盤がある限り、意志もまた法則性に拘束されているはずである、つまり決定論下にあるとフェヒナーは考えたのである。¹¹

フロイトもまた心的自由に関して同様の立場をとる。つまり、「心的自由があるという根深い信仰」(ein tief wurzelnder Glaube an die psychische Freiheit) は「まったく非学問的である」(ganz unwissenschaftlich) とするのである。『精神分析入門』の中でフロイトは次のように述べている。

私はかつてあなたの方の前で、思い切ってこう申し上げたことがあります。すなわちあなた方は、自分たちには心的な自由があり、心を思いのままに出来るという根深い信仰をおもちであるが、そのような信仰はまったく非学問的であり、心的生活をも支配する決定論の要求を前にしては、すくなくとも引き下がるしかないのである、と。

Ich habe mir schon einmal die Freiheit genommen, Ihnen vorzuhalten, daß ein tief wurzelnder Glaube an psychische Freiheit und Willkürlichkeit in Ihnen steckt, der aber ganz unwissenschaftlich ist und vor der Anforderung eines auch das Seelenleben beherrschenden Determinismus die Segel streichen muß. (Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse . 1916-17. GW-XI, S. 104)

同書からもう一箇所、人口に膾炙した決定的な言明を引いておきたい。フロイトは人間の自惚れ

に手痛いしっぺ返しを喰らわした出来事が3つあると言う。その第一は、コペルニクスによる地動説、その第二は、人間が動物から発達したという、ダーウィンやウォレスによる進化論、そして強烈な自負に満ちてフロイトが語る第三の出来事が、自らの心理学研究である。

自我は自分の家の主人などでは決してなく、自分の心的生活において無意識的に生じていることについての僅かばかりの消息に頼るしかないのだということを、自我に対して証明しようとする今日の心理学研究によって、人間の誇大癖は三度目の、非常に手痛い侮蔑を蒙ることとなったのです。

Die dritte und empfindlichste Kränkung aber soll die menschliche Größensucht durch die heutige psychologische Forschung erfahren, welche dem Ich nachweisen will, daß es nicht einmal Herr ist im eigenen Hause, sondern auf krägliche Nachrichten angewiesen bleibt von dem, was unbewußt in seinem Seelenleben vorgeht. (Ebd., S. 295)

自由意志の否定を伴うこのような決定論に対する批判は多かった。またフェヒナー、フロイトの両者とも、極端な決定論を戒めてはいる。

たとえばフェヒナーは『ツェント・アヴェスター』に次のように記している。「我々自身の精神の現状は以下のようになっている。すなわち精神は、自由な一面と必然の、拘束された一面をもっている […]」(In unserem eigenen Geiste zeigt sich's: er hat seine Seite der Freiheit und seine Seite der Nothwendigkeit, Gebundenheit [...]) (*Zend-Avesta*; Teil I, S. 292)。また「我々は、ただ有機的なものの活動においてのみ、我々が漠然とあるいは明確に、自由の範疇に分類する習慣をもつものの痕跡を見出すのもまた、真実である」(Es ist wahr, nur im Spiel des Organischen finden wir überhaupt Spuren von dem, was wir zur Freiheit, gleichviel wie gefaßt, zu rechnen gewohnt sind.) (Ebd., S. 293)。

フロイトもまたレオナルド・ダ・ヴィンチの少年時代を分析する途上、「我々はここで、精神分析ではこれ以上解決できない一定の自由を承認しなくてはならない」(Wir müssen hier einen Grad von Freiheit anerkennen, der psychoanalytisch nicht mehr aufzulösen ist.) („Eine Kindheitserinnerung des Leonardo da Vinci“. 1910. GW-VIII, S. 209) としている。

上記のような留保はあるにせよ、フェヒナーが無意識の存在と、その識閾上を含む心的現象全体への絶大な働きかけを、つまりは無意識の意識への決定論的な力動的作用を承認していたことは事実である。フロイトがその衣鉢を継いでいるということは、多言を要しないであろう。

もう一つフェヒナーを引いておきたい。もしも「精神物理的」(psychophysisch) という形容詞がなければ、我々はフロイトの全集を繙いて、この文章を探していたかもしれない。

[...] この(無意識の: 福元)運動は、[...] 意識的な精神物理的運動にも介入し、その変更を惹起する可能性があるが、その変更の原因は、我々にとっては、無意識の中にとどまり続けたままなのである。

[...] und diese Bewegung kann auch in das Spiel der bewußten psychophysischen Bewegungen [...] eingreifen und Abänderungen darin hervorrufen, deren Grund für uns im Unbewußtsein bleiben. (*Elemente der Psychophysik*; Teil II, S. 433)

3. 局所論的観点

フロイトは、心的な装置がいくつかの機能的差違をもつ系に分かれており、それらが空間的にも分化しているという仮説を立てた。これは解剖学・生理学的な課題でもあり、事実大脳皮質における機能の局所性については、たとえば1874年にカール・ヴェルニッケ (Carl Wernicke; 1848-1905) が失語症に関係する大脳皮質の部分、いわゆる「ヴェルニッケ野」(Wernicke-Areal) を発見していた。フロイトの局所論においても、解剖学・生理学的な研究への言及はあるものの、フロイトの関心はその機能的な局所性の方にあり、「我々は、ここで問題にしている心的機構が解剖標本の形でも知られているということをまったく度外視し、心的な局所性をたとえば解剖学的に規定しようという誘惑を慎重に斥けたいと思う」(Wir wollen ganz beiseite lassen, daß der seelische Apparat, um den es sich hier handelt, uns auch als anatomisches Präparat bekannt ist, und wollen der Versuchung sorgfältig aus dem Wege gehen, die psychische Lokalität etwa anatomisch zu bestimmen.) (*Die Traumdeutung*. 1900. GW-II/III, S. 541) としている。かくしてフロイトの局所論は、空間的な位置の解剖学的定位ではなく、機能的分化の方にアクセントが置かれることになる。

フロイトの局所論は通常、第一次局所論と第二次局所論に分けられる。前者が「意識、前意識、無意識」という区分、後者が「エス、自我、超自我」という区分である。フロイトが第二次局所論を打ち出したのは1920年以降であるが、その時期になっても第一次局所論が放棄されたわけではなく、心的装置の中では両者が共存していることが、たとえば「自我とエス」(„Das Ich und das Es“. 1923. GW-XIII, S. 252) や「続精神分析入門」(„Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse“. 1933. GW-XV, S. 85) には述べられている。ただ、本稿においてその詳細を論じるのは逸脱であろう。ここではあくまでフェヒナーとの関係におけるフロイトの局所論を追う。

フロイトがその初期に無意識との関係で局所論を取り上げた領域が3つある。すなわち「夢」、「錯誤行為」および「機知」である。前二者は、睡眠時あるいは、集中力が減退したときに生じる。「機知」は覚醒時の現象ではあるが、そこには「夢」との独特な共通項が存在するとフロイトは言う。フロイトはこれら三者をひとつの著書(『夢解釈』*Die Traumdeutung*. 1900)と2つの論文(「日常生活の精神病理学のために」(„Zur Psychopathologie des Alltagslebens“. 1901)および「機知とその無意識との関係」(„Der Witz und seine Beziehung zum Unbewußten“. 1905))で論じているが、我々にとって興味深いのは、そのいずれにおいてもフェヒナーの名が出てくるという事実である。以下「夢」、「日常生活の精神病理」のひとつとして挙げられている錯誤行為中の「言い違い」¹²(Versprechen)、最後に「機知」について、フロイトがフェヒナーの何を読み、自らの思考にそれをどのように取り込んだのかを分析する。

3-1. 夢

局所論的 (topologisch: フロイトはしばしば *topisch* と書いている) な観点を再度定義すれば、心的現象は局所において、つまり空間的に限定された状態で生じている、となる。フロイトの第一次局所論では、3つの空間が想定されていた。すなわち「大きな控えの間」([ein] große[r] Vorraum) としての無意識、「第二の、控えの間よりは狭い [...] サロン」(ein zweiter, engerer [...] Salon) としての意識、ならびに両者を繋ぐ「敷居」(Schwelle) にいる「番人」(Wächter) としての前意識である。

これらのシステムの大まかなイメージとしては、空間的なそれがもっとも分かりやすいでしょ

う。無意識のシステムをひとつの大きな控えの間にたとえてみましょう。その中ではたくさんの心的な動きが個々の人間のように忙しく走り回っています。この控えの間に、第二の、それよりは狭い、一種のサロンのような部屋が続いており、そこには意識もとどまっているのです。ところが2つの部屋の間の敷居のところに番人がいて、ひとつひとつの心の動きを丹念に調べ上げ、検閲し、自分の気に入らないことがあれば、その心的な動きをサロンには入れてくれません。¹³ [...] ですから我々がこの第二の空間を、前意識のシステムと呼ぶことは、まったく当を得ているでしょう。

Die roheste Vorstellung von diesen Systemen ist die für uns bequemste; es ist die räumliche. Wir setzen also das System des Unbewußten einem großen Vorraum gleich, in dem sich die seelischen Regungen wie Einzelwesen tummeln. An diesen Vorraum schließe sich ein zweiter, engerer, eine Art Salon, in welchem auch das Bewußtsein verweilt. Aber an der Schwelle zwischen beiden Räumlichkeiten walte ein Wächter seines Amtes, der die einzelnen Seelenregungen mustert, zensuriert und sie nicht in den Salon einläßt, wenn sie sein Mißfallen erregen. [...] Wir heißen darum diesen zweiten Raum mit gutem Recht das System des *Vorbewußten*. (*Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. 1916-17. GW-XI, S. 305f.)

フロイトはすなわち、これら無意識、前意識、意識が心的機構 (psychischer Apparat) を、つまり「心的な諸活動に奉仕する機関」(das Instrument, welches den Seelenleistungen dient) (*Die Traumdeutung*. 1900. GW II/III, S. 541) を構成していると考えたのである。

以上のような局所論(フロイトはここでは「心的局在性」([eine] *psychische Lokalität*) (Ebd., S. 541) という術語を使っている)の発想そのものをフロイトは、以下で見るように、フェヒナーから得たことを隠さない。つまり自らの局所論の発端を、覚醒時と睡眠ないし夢の状態においては、その精神物理学的な現象の「舞台」(Schauplatz) が異なっているという、フェヒナーの発想に帰しているのである。

フェヒナーは意識の閾 (Schwelle) の概念を導入し、精神物理的運動の波形 (Oszillation) が閾の上にある状態を意識、下にある状態を無意識と規定した。¹⁴ 夢に関してフェヒナーは、自らの精神物理学の要点を再度吟味した著書の中で、次のように述べている。少々長くなるが、重要な部分なので、中略なしで引用する。

我々の生体の、覚醒から睡眠に至る時間の経過に伴う精神物理学的な活動の波形が、波形の描く空間、ないしは、我々の生体の内外で普通に見られるような循環運動、たとえば心拍やそれぞれの地点における昼夜の交替といった循環運動と関連しているということ自体、実際にまったく当を得たことであると言える。つまり、睡眠から覚醒へ、また覚醒から睡眠への移り変わりとともに、人間の全精神物理的活動も、その舞台を替えるのである。たとえば覚醒時には、夢の舞台は閾値の下部に完全に隠れているが、覚醒時の表象活動の舞台はどのような状態であっても、閾値の上部のどこかにあるということであり、反対に睡眠時には、覚醒時の表象活動の舞台は閾値の下部に完全に隠れているが、夢の舞台は、非常に下部にまで沈み込んでいる覚醒時の表象の舞台に比べると相対的に高い位置にあり、実際に夢を見ている場合はそれどころか、意識の閾値を超えることすらあるのである。

In der That hat es an sich nichts Unwahrscheinliches, daß die zeitliche Oszillation der psych. Thätigkeit unseres Organismus von Wachen zu Schlaf mit einer räumlichen Oszillation oder

Kreislaufsbewegung in ähnlicher Weise zusammenhängt, als wir es auch sonst in und außer dem Organismus zu finden gewohnt sind. So beim Pulse, so bei Wechsel von Tag und Nacht an jedem Orte. Also mag von Schlaf zu Wachen und von Wachen zu Schlaf das Spiel der gesamten psych. Thätigkeit des Menschen den Schauplatz wechseln, in der Art, daß während des Wachens der Schauplatz der Träume ganz unter der Schwelle bleibt, indeß der Schauplatz des wachen Vorstellungslebens irgendwie und irgendwo darüber ist, wogegen im Schlafe der Schauplatz des wachen Vorstellungslebens ganz unter die Schwelle sinkt, indeß der Schauplatz der Träume sich *relativ* gegen den ganz herabgesunkenen Schauplatz der wachen Vorstellungen erhöht, und bei Eintreten wirklichen Traums sogar bis über die Schwelle des Bewußtseins erhebt. (*Revision der Hauptpunkte der Psychophysik*; S. 286f.)

フェヒナーのこのような「舞台の交替」(Schauplatzwechsel)のコンセプトは、フロイトにおける「夢」、「心的機構」ならびに「機知」に関する議論の枢要な部分を担っている。

フリースに宛てた1898年2月9日付の手紙でフロイトは、1900年に上梓されることになる『夢解釈』を書きすすめながら、読まなくてはならない文献の多さに辟易しつつ、次のように書いている。

僕は今夢の本に集中していて、どんどん書き進めているよ。[...] 文献を読まなくてもいいならどんなにいいだろう。少し読むだけで、もう嫌になるよ。唯一老フェヒナーだけが、まっとうなことを至極明快に考えていたようだ。つまり夢の過程は別の心的領域で生じているということだ。この領域の最初の粗略な地図を僕は描いてみようと思う。

Ich bin tief im Traumbuch, schreibe es fließend [...]. Wenn man nicht auch lesen müßte! Das bißchen Literatur ist mir schon zuwider. Das einzige vernünftige Wort ist dem alten Fechner in seiner erhabenen Einfalt in den Sinn gekommen. Der Traumvorgang spielt auf einem anderen psychischen Terrain. Die erste rohe Karte dieses Terrains werde ich mitteilen. (*Aus den Anfängen*; S. 210)

「夢の過程は別の心的領域で生じている」という記述は、フェヒナーの「舞台の交替」を言い換えたものである。フェヒナーへの言及は、上記書簡で「夢の本」と書かれている『夢解釈』そのものにもある。フリースへの手紙は著書の中では、次のように敷衍されている。

『精神物理学原論』(第2部520ページ)におけるいくつかの叙述からも分かるように、夢と覚醒時の本質的な相違を強調し、その相違をさらに広範囲にわたる結論を導くために応用した人は、G. Th. フェヒナーの他に誰もいない。フェヒナーは「意識的な心的活動を単純に主要関の下に押し込め」たり、外界からの影響に対する注意力を減退させたりするだけでは、覚醒時のそれに対する夢の活動の特殊性を解明するには不十分である、と言っている。フェヒナーはむしろ、夢の舞台は覚醒時の表象活動の舞台とは異なる、と推察しているのである。

Niemand hat die Wesensverschiedenheit von Traum- und Wachleben stärker betont und zu weitgehenderen Schlüssen verwendet als G. Th. Fechner in einigen Bemerkungen seiner „Elemente der Psychophysik“. (S. 520, II.T.) Er meint, „weder die einfache Herabdrückung des bewußten Seelenlebens unter die Hauptschwelle“, noch die Abziehung der Aufmerksamkeit von den Einflüssen der Außenwelt genüge, um die Eigentümlichkeiten des Traumlebens dem wachen Leben gegenüber aufzuklären. Er vermutet vielmehr, daß auch der *Schauplatz der Träume ein anderer ist als der des wachen Vorstellungslebens*. (*Die Traumdeutung*. 1900. GW II/III, S. 50f.)

フロイトが参照することを促した『精神物理学原論』第2部520ページには、何が書かれているのであろう。

もしも睡眠時と覚醒時の精神物理的活動の舞台が同じものであるとすれば、夢は、私見によれば、単により低い強度に保たれている、覚醒時の表象活動の続きにすぎず、またそのような覚醒時の表象活動の素材と形式を分かちもっていないとはならない。しかし事態はまったく異なるのである […]。

Sollte der Schauplatz der psychophysischen Tätigkeit während des Schlafes und Wachens derselbe sein, so könnte der Traum meines Erachtens bloß eine, auf einem niederen Grade der Intensität sich haltende, Fortsetzung des wachen Vorstellungslebens sein, und müßte übrigens dessen Stoff und dessen Form teilen. Aber es verhält sich ganz anders: [...] (*Elemente der Psychophysik*; Teil II, S. 520; 3. Aufl. S. 512)

まさに上記の部分をフロイトは、自らの著書『夢解釈』にそのまま¹⁵引いている (GW II/III, S. 51)。フロイトはさらに、難解をもって知られる『夢解釈』の第7章、夢分析を理論化しようとした「夢過程の心理学に向けて」において、フェヒナーの『精神物理学原論』第2部520ページにおける記述に再度言及している。

様々な論者が夢の理論に関していろいろな見解を述べているが、その中で私はひとつの見解を解明の糸口となるものとして強調しておきたい。偉大な G. Th. フェヒナーはその『精神物理学』(第2部520ページ)において、夢に関するいくつかの議論との関連で、夢の舞台は覚醒時の表象活動とは異なっているのではないかという推察を述べた。夢の活動の際立って特殊な性質を理解するには、これ以外の仮説は許容されないと言うのである。

Unter allen Bemerkungen zur Theorie des Träumens, welche man bei den Autoren finden kann, möchte ich eine als anknüpfenswert hervorheben. Der große G. Th. Fechner spricht in seiner „Psychophysik“ (II. Teil, S. 520) im Zusammenhange einiger Erörterungen, die er dem Traume widmet, die Vermutung aus, daß der Schauplatz der Träume ein anderer sei als der des wachen Vorstellungslebens. Keine andere Annahme gestatte es, die besonderen Eigentümlichkeiten des Traumlebens zu begreifen. (*Die Traumdeutung*. 1900. GW II/III, S. 540f.)

以上のようにフロイトは、覚醒時と夢を見ている状態では、心的活動の行われる場が異なる、つまり舞台が交替する(舞台交替)という発想をフェヒナーから得ており、そうでなければ夢の特殊性は説明できないというフェヒナーの見解を引き継いでいるということができる。

ところで、「舞台が交替する」ということは、時間の経過にしたがって、心的活動の場所が移動するというに他ならない。ここには如実に局所論的な観点が表れていると言えるであろう。フェヒナーはこのような移動を *Umsiedlung* という術語で表現したが、フロイトはこの考え方をヒントとして、心の構造ないし機構についての仮説を立てている。

フェヒナーがこのような心的活動の場所の移動でもって考えたことが、解明されたとは言えないであろう。また私が知る限り、フェヒナー以外の何人も、フェヒナーが上記の箇所(=夢における「舞台の交替」という考え方; 福元)で示した考えの道筋を辿ってみようとはしなかった。[…]

しかし、もしも我々がフェヒナーのこのような考えを、背後へと幾層かになって重なっている審級によって構成された心的機構というものに関連づけて考察するなら、フェヒナーのこのような考え方はおそらく、意義深く実り多いものであることが証明される時を迎えるであろう。

Was *Fechner* mit einer solchen Umsiedlung der Seelentätigkeit meint, ist wohl nicht klar geworden; auch hat kein anderer, soviel ich weiß, den Weg weiter verfolgt, dessen Spur er in jener Bemerkung aufgezeigt. [...] Vielleicht aber erweist sich der Gedanke einmal als sinnreich und fruchtbar, wenn man ihn auf einen seelischen Apparat bezieht, der aus mehreren hintereinander geschalteten Instanzen aufgebaut ist. (Ebd., S. 51)

ここからは、審級への分化を特徴とするフロイトにおける「心的機構」(seelischer Apparat ないし psychischer Apparat) という重要な概念もまた、フェヒナーによるインスピレーションなくしては考えられないことが分かる。事実フロイトは『夢解釈』の第7章において、局所論との関係で再び夢の「舞台の交替」に言及し、「心的機構」について説明している。先ほどヴェルニッケ野との関連で引用した部分を含むパッセージを以下に引く。

このようにして我々の利用に供された着想 (= 舞台の交替; 福元) はすなわち、心的局所論の着想でもある。我々は、ここで問題にしている心的機構が解剖標本の形でも知られているということをもまったく度外視し、心的な局在性をたとえば解剖学的に規定しようという誘惑を慎重に斥けたいと思う。我々は心理学の基盤の上にとどまり、心的活動に奉仕する仕組みを、たとえば組み立てられた顕微鏡や写真機のようなものとして思い描いてみよう。[...] 我々はつまり、心的機構を、ひとつの組み立てられた仕組みとして思い描くわけであるが、その構成要素を審級、ないしは、よりイメージしやすい表現を用いれば、システムと呼んでみたい。

Die Idee (des Schauplatzwechsels; Fukumoto), die uns so zur Verfügung gestellt wird, ist die einer *psychischen Lokalität*. Wir wollen ganz beiseite lassen, daß der seelische Apparat, um den es sich hier handelt, uns auch als anatomisches Präparat bekannt ist, und wollen der Versuchung sorgfältig aus dem Wege gehen, die psychische Lokalität etwa anatomisch zu bestimmen. Wir bleiben auf psychologischem Boden und gedenken nur der Aufforderung zu folgen, daß wir uns das Instrument, welches den Seelenleistungen dient, vorstellen wie etwa ein zusammengesetztes Mikroskop, einen photographischen Apparat u. dgl. [...] Wir stellen also den seelischen Apparat vor als ein zusammengesetztes Instrument, dessen Bestandteile wir *Instanzen* oder der Anschaulichkeit zuliebe *Systeme* heißen wollen. (Ebd., S. 540f.)

夢におけるほど「舞台の交替」が明確ではないにせよ、完全な覚醒状態になく、注意力が散漫である場合、意図された行為が遂行されず、その意味において錯誤行為ないし失錯行為が遂行されることがある。次節ではこの錯誤行為に関するフェヒナーとフロイトの論を取り上げる。

3-2. 錯誤行為

フロイトは「日常生活の精神病理学のために」(„Zur Psychopathologie des Alltagslebens“. 1901) において、多くの錯誤行為を収集している。ドイツ語の場合、接頭辞 ver- のつく動詞不定形の中性名詞化をもって、これらを簡潔に列挙することができる。つまり Vergessen (度忘れ)、Versprechen (言い違い)、Verlesen (読み違い)、Verschreiben (書き違い)、Vergreifen (やり損い)、Verlieren (置

き忘れ) 等である。ここでは「言い違い」の例を取り上げてみたい。

フロイトはオーストリア国会の議長が「これでもって会議の開会を宣します」というべきところ、「これでもって会議の閉会を宣します」(„Ich [...] erkläre somit die Sitzung für geschlossen!“) („Zur Psychopathologie des Alltagslebens“. 1901. GW-IV, S. 67) と言ってしまった「言い違い」を取り上げている。議長はおそらく、「大した成果も期待できないこの会議を、できれば早々に閉会したいと欲していた [...]」(„[...] , daß der Präsident sich wünschte, er wäre schon in der Lage, die Sitzung, von der wenig Gutes zu erwarten stand, zu schließen, [...]“) (Ebd., S. 67) というのが、フロイトの見立てである。そして、このような「言い違い」は「話者の内面で、発話された文に対する抵抗が生じたせいである」(„[...] infolge eines Widerstandes geschieht, der sich im Innern des Redners gegen den geäußerten Satz erhebt.“) (Ebd., S. 68) としている。

その他にもフロイトは、数多くの「言い違い」の例を収集している。ある教授がその就任講演で「はなはだ尊敬いたしております私の前任の先生の功績」について、私には述べる「資格がありません」(nicht geeignet) と言うべきところを、私には述べる「つもりはありません」(nicht geneigt) と言ってしまった19番目の例 (Ebd., S. 78)。あるいは、解剖学の教授が「女性の性器については、私たちは多くの誘惑 (Versuchung) — 失礼、実験 (Versuchen) にもかかわらず……」と言ってしまった37番目の例 (Ebd., S. 88)。もちろん「言い違い」は教授連だけがするものではない。軍人や女性たちの「言い違い」の例にもフロイトは事欠かない。

一方フェヒナーもまた、このような「言い違い」並びに「誤植」の例を『美学入門』(Vorschule der Ästhetik. 1876) において収集しているが、こちらの方はほとんど知られていないように思われる。「誤植」は一見すると「言い違い」と性格が異なるようにも思われるが、「言い違い」を「活字の置き違い」と解釈すれば、そこに本質的な差違はないと言えるであろう。

フェヒナーが『美学入門』で挙げた、まずは「誤植」の例を紹介したい。「ある地主が彼のすべての土地を飲みつぶそうとしている」(Ein Gutsbesitzer beabsichtigt alle seine Güter zu versaufen.)¹⁶ 本来であればこの文は、「ある地主が彼のすべての土地を売ろうとしている」(Ein Gutsbesitzer beabsichtigt alle seine Güter zu verkaufen.) (Vorschule der Ästhetik; S. 225) とすべきであった。あるいは、「妻の病気が幸運にも快癒したことに対する夫からの医師に対する公的な謝辞」(Oeffentliche Danksagung an den Arzt Seitens eines Gatten dafür, dass er die Krankheit seiner Frau einer glücklichen Beendigung zugeführt habe.) とすべきところを、「病気の妻を幸運にも埋葬したことに対する夫からの医師に対する公的な謝辞」(Oeffentliche Danksagung an den Arzt Seitens eines Gatten dafür, dass er die Krankheit seiner Frau einer glücklichen Beerdigung zugeführt habe.) (Ebd., S. 225f.) と言ってしまった例などが挙げられている。さらに「言い違い」では、「月が地平線からきらきらと輝いてのぼってきた」(Der Mond kam am Horizonte in vollem Glanze herauf.) と言うべきところ、「月が地平線から必死の駆けあしで^{かけあし}のぼってきた」(Der Mond kam am Horizonte in vollem Galopp herauf.) (Ebd., S. 226) と言ってしまった例などが挙げられている。

このような「不注意」(Zerstreuung) をフェヒナーは次のように解説している。

一般におかしみを誘う不注意の場合、目的が、本来それに到達するために採用すべき方法によってではなく、それとはまったく矛盾するような方法を用いて到達されようとしていることに気づく。この矛盾を連結している部分は、これらの矛盾する表象が一カ所に集まって、双方に共通したものとなる目的の表象である。

Bei lächerlichen Zerstreuungen sieht man gemeinhin, dass ein Zweck auf eine Weise zu erreichen

gesucht wird, die der Weise, wie es zu erreichen wäre, ganz widerspricht. Das Bindeglied dieses Widerspruchs ist die gemeinsame Zweckvorstellung, in welcher die widersprechenden Vorstellungen zusammenlaufen. (Ebd., S. 226)

例に即して考えると次のようになるであろう。最初の「飲みつぶす」と「売る」の取り違えについて、不動産を動産に変える、つまり現金化するという「目的」は共通している。「売る」のは通常の手段であるが、「飲みつぶす」の方は、飲酒に代表される放恣な生活のために、土地を手放して現金化しなければならない、ということの意味しているのである。妻の「病気の快癒」と「埋葬」については、言表の「目的」が医師への感謝であることは明確である。しかしその感謝が「病気の治療」に対するものなのか、あるいは「妻を亡きものにしてほしい」という密かな願望を、無意識のうちに医師に付託していたからなのかは、あいまいなままである。

フロイトは、次節の機知論との関連で改めて取り上げることになるが、フェヒナーの『美学入門』を非常に熱心に読んでおり、フェヒナーが収集した「言い違い」の例も熟知していた。ただ、フロイトがこのような錯誤行為の実例を収集したのは、単にフェヒナーをまねただけではもちろんない。夢の理論におけるフェヒナーからの影響については先述したが、フロイトは錯誤行為を夢形成における縮合作業の萌芽と位置づけており、錯誤行為もまた、覚醒時とは異なる局所ないしは審級がその舞台となっていると考えたのである。ここでも「舞台の交替」が重要であるとすれば、錯誤行為論においてフェヒナーが果たした役割は明確である。本節の最後に、「言い違い」という錯誤行為と夢の共通性、すなわち、錯誤行為が夢形成における縮合作業の萌芽的な形であるとフロイトが述べている一節を示しておきたい。

ところで私は、『夢解釈』において、いわゆる潜在的な夢思考から顕在的な夢内容が生じてくるのに、縮合作業がどのような役割を果たしているのかを明らかにした。そこでは、無意識の素材の2つの要素の間に、事物や語表象に関する何らかの類似がある場合、それが機縁となって第三のもの、つまり混合表象ないしは妥協表象が生じ、これが夢内容の中で自分のものになった2つの構成要素を代表するのである。第三のものはこのようにして形成されるので、それはしばしば、相互に矛盾し合う個々の特質を備えているのである。つまり、「言い違い」における置換や混淆の形成は、夢を形作る作業に懸命に従事しているあの縮合作業の、萌芽と言えるのである。

Nun habe ich in meiner Schrift über die „Traumdeutung“ dargetan, welchen Anteil die Verdichtungsarbeit an der Entstehung des sogenannten manifesten Trauminhalts aus den latenten Traumgedanken hat. Irgend eine Ähnlichkeit der Dinge oder der Wortvorstellungen zwischen zwei Elementen des unbewußten Materials wird da zum Anlaß genommen, um ein Drittes, eine Misch- oder Kompromißvorstellung zu schaffen, welche im Trauminhalt ihre beiden Komponenten vertritt, und die infolge dieses Ursprungs so häufig mit widersprechenden Einzelbestimmungen ausgestattet ist. Die Bildung von Substitutionen und Kontaminationen beim Versprechen ist somit ein Beginn jener Verdichtungsarbeit, die wir in eifrigster Tätigkeit am Aufbau des Traumes beteiligt finden. („Zur Psychopathologie des Alltagslebens“. 1901. GW-IV, S. 66f.)

矛盾する2つの素材が混合表象ないし妥協表象を形成し、縮合する——それによって「土地の売却と放恣な生活による家の没落」が、妻の「病気の快癒と埋葬」が、月の「輝きと駆歩」が縮合し、

そこに「相互に矛盾し合う個々の特質を備えている」第三のものが出現するのを、我々は先ほど見たところである。

3-3. 機 知

機知論¹⁷においてもフロイトは、フェヒナーの「舞台の交替」を援用する。というのも、機知と、覚醒時とは異なる舞台上で展開される夢の間には、その生成に共通する仕組みがあるとフロイトは考えるからである。この考えは特に機知論の第6節、「機知と夢、および無意識との関係」で展開されている。

フロイトが『夢解釈』で行った夢の作業 (Traumarbeit) の詳細については、フロイトが述べるように我々も「既知のものと想定してよいとするなら」(wenn wir [...] die „Traumarbeit“ — als bekannt annehmen dürften) („Der Witz und seine Beziehung zum Unbewußten“, 1905. GW-VI, S. 181)、機知の産出と夢の作業の共通性は端的に次のように表すことができる。すなわち、

[...] 代替形成を伴う縮合と伴っていない縮合、遷移、不条理や反対物による呈示、間接的呈示などの諸課程が、機知の産出にかかわっていることを我々は見出したのだが、これらは「夢の作業」の諸過程ときわめて多くの一致点を示している [...]。

[...] daß die Vorgänge der Verdichtung mit und ohne Ersatzbildung, der Verschiebung, der Darstellung durch Widersinn, durch das Gegenteil, der indirekten Darstellung u. a., welche wir an der Herstellung des Witzes beteiligt fanden, eine sehr weitgehende Übereinstimmung mit den Vorgängen der „Traumarbeit“ zeigen, [...]. (Ebd., S. 181)

また「夢の作業に帰すことができる三大機能」(die drei großen Leistungen, die wir der Traumarbeit zuschreiben dürften) (Ebd., S. 187) としてフロイトは「呈示できる形への転換、縮合と遷移」(Umwandlung zur Darstellungsfähigkeit, Verdichtung und Verschiebung) (Ebd., S. 187) を挙げているが、この三大機能については、機知の産出の場合もまた同じであるという。フロイトが機知論の前半「A 分析部」ならびに「B 総合部」で収集・分類している機知の諸例は、機知にもこのような三大機能が備わっていることを例示するためであったと言ってよい。夢と機知の共通性についてフロイトは最終的に、文全体を強調して、以下のようにまとめている。

前意識的な思考がいつとき無意識的な加工に委ねられ、その成果が直ちに意識的な知覚によって捉えられるのである。

Ein vorbewußter Gedanke wird für einen Moment der unbewußten Bearbeitung überlassen, und deren Ergebnis alsbald von der bewußten Wahrnehmung erfaßt. (Ebd., S. 189)

このように夢と機知がともに「無意識的な加工」を蒙るとすれば、そこには局所論的な移動が、つまりフェヒナーの言う「舞台の交替」があるはずである。確かにフロイトは目立たないながら、脚注のひとつでフェヒナーの「舞台の交替」に触れている。

我々はまた、なぜカリカチュアや誇張、パロディに「機知的なもの」という性格が付け加わることができるのかを理解することができる。それを可能にするのは、「心理的な舞台」が異なるからなのである。¹

1) これは私の見解にとって重要になった G. Th. フェヒナーの表現である。

Wir verstehen nun auch, warum der Charakter des „Witzigen“ zur Karikatur, Übertreibung, Parodie als Zutat hinzukommen kann; es ist die Verschiedenheit des „psychischen Schauplatzes“, die das ermöglicht.¹

1) Ein für meine Auffassung bedeutsam gewordener Ausdruck von G. Th. Fechner. (Ebd., S. 200)

機知論においてはしかし、「舞台の交替」以外にも、フロイトがフェヒナーから示唆を得たコンセプトが2つある。それらは「予備的快の原理」(Vorlustprinzip)と「一体化」(Unifizierung)である。

3-3-1. 「予備的快の原理」(Vorlustprinzip)

フロイトは機知論の「B 総合部」において、フェヒナーの『美学入門』第1巻第5章から、長いパッセージをそのまま引用している。¹⁸ フェヒナーの言う「美的な補助ないし高揚の原則」(Prinzip der ästhetischen Hilfe oder Steigerung)に注意を促すためである。

G. Th. フェヒナーは著書『美学入門』(I. Band, V)の中で「美的な補助ないし高揚の原則」を打ち立て、次のように説明している。「それだけでは大した効果をあげない快のいくつかの条件が矛盾なく結合すると、個々の条件に見合った快の値よりも大きな、しばしばずっと大きな快をもたらす結果になることがある。それは、個々の効果の総和として説明できる値よりも大きな値となるのである。いや、この種の結合が起こるだけで、個々の快の要素はそれには微弱にすぎるとはかかわらず、肯定的な快という結果が得られ、快を感じ始める閾値を超え出ることが可能になるのである。もともと個々の快の要素は、他の要素と比較して、快を生み出す力において優れているということを感じさせなければならないのではあるが。」

G. Th. Fechner hat in seiner „Vorschule der Ästhetik“ (I. Band, V) das „Prinzip der ästhetischen Hilfe oder Steigerung“ aufgestellt, das er in folgenden Worten ausführt: „Aus dem widerspruchslosen Zusammentreffen von Lustbedingungen, die für sich wenig leisten, geht ein größeres, oft viel größeres Lustresultat hervor, als dem Lustwerte der einzelnen Bedingungen für sich entspricht, ein größeres, als daß es als Summe der Einzelwirkungen erklärt werden könnte; ja es kann selbst durch ein Zusammentreffen dieser Art ein positives Lustergebnis erzielt, die Schwelle der Lust überstiegen werden, wo die einzelnen Faktoren zu schwach dazu sind; nur daß sie vergleichsweise mit anderen einen Vorteil der Wohlgefälligkeit spürbar werden lassen müssen.“ (Ebd., S. 151f.)

微弱な快の要素が矛盾なく結合した場合に、このような特殊な効果が発揮されること、つまり、個々の快の要素の総和よりも生み出される快の方が大きくなることについて、フロイトは、「[...] 機知というテーマはこの原則の正しさを [...] 証明する機会をあまり与えてくれない」(「[...] das Thema des Witzes gibt uns nicht viel Gelegenheit, die Richtigkeit dieses Prinzips [...] zu bestätigen」)(Ebd., S. 152)としながらも、この原則自体は非常に興味深いものと考えており、「我々はこの補助の原則で想定された状況を変更して、その新しい条件のもとで、解答する価値のある一連の問いを提起することはできるであろう」(Man kann aber die in dem Prinzip der Hilfe angenommene Situation variieren und für diese neuen Bedingungen eine Reihe von Fragestellungen erzielen, die der Beantwortungen würdig

wären.) (End., S. 154) と記している。また、いわゆる傾向的機知¹⁹の場合には、実際にこの補助の原則が適用可能であることを指摘する。

我々には、傾向的機知の場合が補助の法則の特殊な例であることが分かる。ある快の可能性が阻まれて、独力では快を生み出せないような状況下で、別の快の可能性が加わったとしよう。その結果として展開される快は、もともとの快がもたらしうる快の可能性よりもずっと大きい。後から加わった方の快には、いわば呼び水の効果があつたのである。わずかな量の快が提供されたことが助けとなつて、そうでなければ達成がおぼつかないような、非常に大きな快が得られたのである。私はこの原則が、互いに離れている多くの心的活動の領域で機能している、ひとつの装置の仕組みを表したものであると考える十分な根拠をもっている。また、大きな快を惹起するのに奉仕する快を予備的快と、またこの原則を予備的快の原則と名付けることは、私には的外れではないと思われる。

Wir sehen [...], daß der Fall des tendenziösen Witzes ein Spezialfall des Prinzips der Hilfe ist. Eine Möglichkeit der Lustentwicklung tritt zu einer Situation hinzu, in welcher eine andere Lustmöglichkeit verhindert ist, so daß diese für sich allein keine Lust ergeben würde; das Ergebnis ist eine Lustentwicklung, die weit größer ist als die der hinzugetretenen Möglichkeit. Letztere hat gleichsam als *Verlockungsprämie* gewirkt; mit Hilfe eines dargebotenen kleinen Betrags von Lust ist ein sehr großer, sonst schwer zu erreichender gewonnen worden. Ich habe guten Grund zu vermuten, daß dieses Prinzip einer Einrichtung entspricht, die sich auf vielen, fern voneinandergelegenen Gebieten des Seelenlebens bewährt, und halte es für zweckmäßig, die zur Auslösung der großen Lustentbindung dienende Lust als *Vorlust* und das Prinzip als *Vorlustprinzip* zu bezeichnen. (Ebd., S. 153f.)

以上のようにフロイトは、フェヒナーが『美学入門』で展開した「美的な補助ないし高揚の原則」に基づいて、「予備的快の原則」を主張した。それはより大きな快を生むための「呼び水」として機能するような快であつた。重要なのは、フロイトがこの原則を「互いに離れている多くの心的活動の領域で機能している、ひとつの装置の仕組みを表したもの」と考えていることである。この「装置」とは「心的装置」の謂いであり、「互いに離れている多くの心的活動の領域」でもって言われているのは、局所論的な観点に他ならないからである。

3-3-2. 「一体化」(Unifizierung)

フロイトはさらに、「一体化」(Unifizierung)の概念形成において、フェヒナーを参照している。「一体化」とは、「思いがけない関連を創り出すこと」(Herstellung eines ungeahnten Zusammenhangs) (Ebd., S. 90)、ないし「新しい思いがけない統一、諸表象の相互関連、定義の混淆、あるいはその関連を通して第三のものが創り出されること」(neue und unerwartete Einheiten hergestellt sind, Beziehungen von Vorstellungen zueinander, und Definitionen durcheinander oder durch die Beziehung auf ein gemeinsames Drittes) (Ebd., S. 71)を意味する。フロイトにとっては、これが夢と機知の生成の両方に共通する、「同一語への圧縮による縮合に類似していることは明らか」(offenbar der Verdichtung durch Zusammendrängung in die nämlichen Worte analog [sein]) (Ebd., S. 71)であつた。フロイトはこの記述の直後に欄外注で、「『一体化』というものをよりよく [...] 説明するために」(um die „Unifizierung“ besser [...] zu beschreiben)、フェヒナーを引き合いに出す。

哲学者フェヒナーが、目が見えなくなっていた一時期、時間つぶしにこしらえた謎々の多くは、高度な一体化によって際立っており、それがこれらに特別な魅力を与えている。たとえば見事な203番（ミーゼス博士の謎々の本、増補第4版、出版年の記載なし）の謎々を見てみよう。

「最初の2つは彼らの憩いの場を見出す。

残り2つと組みになって。全体で彼らのベッドになる。」

回答すべき2つの音節のペアについては、互いの関係しか述べられていない。また全体については、最初の音節のペアとの関係しか述べられていない。（答えは墓堀人）。

Viele der Rätsel, mit deren Produktion sich der Philosoph G. Th. Fechner die Zeit seiner Erblindung vertrieb, zeichnen sich durch einen hohen Grad von Unifizierung aus, der ihnen einen besonderen Reiz verleiht. Man nehme z. B. das schöne Rätsel Nr. 203 (Rätselbüchlein von Dr. Mises. Vierte vermehrte Auflage, Jahreszahl nicht angegeben):

„Die beiden ersten finden ihre Ruhestätte

Im Paar der andern, und das Ganze macht ihr Bette.“

Von den beiden Silbenpaaren, die zu erraten sind, ist nichts angegeben als eine Beziehung zueinander, und vom Ganzen nur eine solche zum ersten Paar. (Die Auflösung lautet: Totengräber.) (Ebd., S. 71f.)

フロイトは『『一体化』というものをよりよく [...] 説明するために』この例を引いているのだが、かえって分かりにくいように思われる。最初の音節のペアがすなわち To- ten（死者）、2番目の音節のペアが grä- ber（掘る人）であり、全体で Totengräber（墓堀人）となることによって、「死者たちのベッド」である墓が出来上がる、という訳である。我々読者にとってはしかし、「一体化」の例としては以下のようなものの方がより分かりやすいであろう。

ある詩人が「後世の人々へ」と題された頌歌を作った。それに対してヴォルテールはこう言った。「この詩はその名宛人には届かないであろう」（„Dieses Gedicht wird nicht an seine Adresse gelangen.“）（Ebd., S. 72）。

国中を旅している殿下が、群衆の中に自分と瓜二つの背の高い男がいるのに気づいた。呼び寄せてこう尋ねた。「そなたの母親は、もしや昔、主宮に出仕していたのではないか」－「いいえ殿下」と男は答えた。「しかし、父親なら。」（„Hat Seine Mutter wohl einmal in der Residenz gedient?“－„Nein, Durchlaucht,“ lautet die Antwort, „aber mein Vater.“（Ebd., S. 73）。

またフロイトは、一体化の「特段興味深い技法的な手段」（ganz besonders interessantes technisches Mittel）（Ebd., S. 73）として、接続詞 und を使った羅列を挙げている。思いがけない関連を創り出すには、この技法は確かに効果的である。フロイトはあまたの例を挙げているが、ハイネ²⁰の『ハルツ紀行』からの例は面白い。ハイネはゲッティンゲンという都市について「一般にゲッティンゲンの住人は、学生、教授、俗物、そして家畜に分類される」（„Im allgemeinen werden die Bewohner Göttingens eingeteilt in Studenten, Professoren, Philister und Vieh“）（Ebd., S. 73）と書いている。最後の und についてフロイトは、ハイネが「とはいえ、この4つの身分は決して厳密に隔てられてはいない」（vier Stände doch nichts weniger als scharf geschieden sind）（Ebd., S. 73）と補足しているように理解するとしている。「と」（und）による羅列が「一体化」という機知を生み出すことは、日本語においても同様であろう。

「一体化」とフェヒナーの関係に話を戻せば、フロイトは機知論の「B 総合部」で再びフェヒナーに言及し、機知のもたらす快の源泉として、フェヒナーが「一体化」に特段の評価を与えている

(Die Unifizierung [...] hat bei *G. Th. Fechner* eine besondere Anerkennung als Lustquelle des Witzes gefunden.) (Vgl. Ebd., S. 139) ことを指摘しつつ『美学入門』の第1巻第17章を引用する。

「私見によれば、ここで我々が目の当たりにしている領域においては、多様なものの結合の原則が主要な役割を演じている。しかしそれを支持する副次的な条件が整わないと、これに属するケースが生み出すことのできる楽しみは、その独特の性格を保ったまま、閾値を超えることはできないであろう。」

„Meines Erachtens spielt in dem Felde, was wir hier vor Augen haben, das Prinzip der einheitlichen Verknüpfung des Mannigfaltigen die Hauptrolle, bedarf aber noch unterstützender Nebenbedingungen, um das Vergnügen, was die hierher gehörigen Fälle gewähren können, mit seinem eigentümlichen Charakter über die Schwelle zu treiben.“ (Ebd., S. 139) (Vgl. *Vorschule der Ästhetik*; S. 221)²¹

このようにフロイトは、フェヒナーが『美学入門』で論じた「多様性の統一的結合の原理」(Prinzip der einheitlichen Verknüpfung des Mannigfaltigen)を援用し、「一体化」の概念を形成したのである。「一体化」によって快が増すことは、前節でみた「予備的快の原理」と同じであり、「予備的快の原理」では快の量が、「一体化」では快を生み出す質が問題にされているとすることができるであろう。

以上のように、フロイトの「メタ心理学」においては、その力動的観点、局所論的観点(夢、錯誤行為、機知)のいずれについても、フェヒナーのフロイトへの影響が、甚大かつ決定的であったことが分かる。鍵となるのはフェヒナーの「舞台の交替」説である。それが無意識そのものの力動や、夢、錯誤行為、機知に共通する局所ないし審級の移動を伴う「夢の作業」の仮説の基礎を形成しているからである。フロイトが

私はつねに *G. Th. Fechner* のアイデアを受け入れるのに吝かではなく、重要な点に関してはこの思想家を頼みにすることもあった。

Ich war immer für die Ideen *G. Th. Fechners* zugänglich und habe mich auch in wichtigen Punkten an diesen Denker angelehnt. („Selbstdarstellung“. 1925. GW-XIV, S. 86)

と言う所以である。

「メタ心理学」の三番目の観点、すなわち経済論的観点については、次稿に譲る。

(続)

(本稿は JPS 科研費24520362の助成を受けたものです)

注

- 1 福元圭太「フェヒナーからフロイトへ (1) — グスタフ・テオドール・フェヒナーの系譜 (6) —」『言語文化論究』第33号、九州大学言語文化研究院、2014年、39-54頁。
- 2 Buggle, Franz / Wirtgen, Paul: Gustav Theodor Fechner und die Psychoanalytischen Modellvorstellungen Sigmund Freuds. Einflüsse und Parallelen. In: *Archiv für die gesamte Psychologie*. Bd. 121, 1968. S. 148-201.
- 3 筆者が導きの系としたブグレ／ヴィルトゲンの論考もまた、ドーラーやヘルマン、ビンスヴァンガーやエレンベルガーの研究を批判的に検討することによって、フェヒナーのフロイトへの影響関係を網羅的に扱おうと試みたものである。これについては注1に挙げた拙稿：「フェヒナーからフロイトへ (1) — グスタフ・テオドール・フェヒナーの系譜 (6) —」を参照されたい。なお、ブグレ／ヴィルトゲンの論文では、フロイトを不正確に引用した箇所が多数見られる。いちいち指摘しないが、(前稿においてもそうであったように) 引用文は原典に当たって正確を期した。
- 4 Dorsch, Friedrich: *Psychologisches Wörterbuch*. (8., neubearb. und erw. Aufl.) Hrsg. unter Mitwirkung von Werner Traxel. Felix Meiner, Hamburg 1970. S. 301.
- 5 フロイトは1921年に「精神分析とテレパシー」 („Psychoanalyse und Telepathie“) (死後の1941年公刊)、1922年には「夢とテレパシー」 („Traum und Telepathie“) という論文を書いている。また1933年の『続精神分析入門』の中には「夢とオカルティズム」 („Traum und Okkultismus“) という講義が収められている。
- 6 バルトは1896年の書簡としているが、誤りである。Vgl. Barth, Thomas: *Wer Freud Ideen gab: Eine systematische Untersuchung*. Waxmann Verlag GmbH, Münster 2013. S. 182.
- 7 フロイトの全集からの引用以外については、論文名、著書名に関して略記を記載する。詳細については後の文献一覧を参照されたい。
- 8 フロイトの全集からの引用は、以下の版を用いた。Freud, Sigmund: *Gesammelte Werke. Chronologisch geordnet*. Imago Publishing Co., LTD. London 1941-51. GWのあとのローマ数字は巻数を表す。なおオリジナルで隔字体となっている強調は本稿ではイタリックで表し、訳文には傍点を付した。
- 9 フェヒナーにおける無意識の詳細については、拙稿『『精神物理学原論』の射程 — フェヒナーにおける自然哲学の自然科学的基盤 —』『西日本ドイツ文学』第24号所収、日本独文学会西日本支部、13-27頁、特に20頁以下を参照されたい。
- 10 その点でフェヒナーは、精神活動をも物理・化学的に還元できると考える機械論者であると捉えることもできそうであるが、実はそうではない。これについては注11を参照。
- 11 ただしフェヒナーは、これまでの論文で述べたように、意志を物理や化学に還元可能であると考えた機械論者ではまったくない。フェヒナーの場合、精神と物理の一体性から精神を物理化する方向へは進まず、逆に物理的なものに精神性を認め、汎心理論、万物賦霊論の方向へと進んだ。そして万物の精神を包括するものとして神の精神 (ないし意識) を指定したのである。
- 12 「言い間違い」よりは「言い違い」という訳語の方が適切であると思われるので、すこしこねない言い方であるが「言い違い」を採用した。ちなみに岩波版『フロイト全集』第7巻の高田珠樹訳においても「言い違い」が採用されている。『フロイト全集』第7巻。岩波書店、2007年。
- 13 このような検閲によって無意識に押しとどめられることが、フロイトにおける「抑圧」 (*Verdrängung*) の謂いである。(*Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. 1916-17. GW-XI,

S. 304)

- 14 注9を参照されたい。
- 15 ただしフロイトの引用には一カ所間違いがある。フェヒナーのオリジナルでは während des Schlafes であるが、フロイトは während des Schlafens としている。
- 16 オリジナルにはないが、「誤植」ないし「言い違い」に相当する箇所を強調するため、下線を引いた。
- 17 論述に直接的な関係はないものの、前節の「言い違い」についてと同様、機知論は、ドイツ語を母語としない読者にとっては、分かりにくい部分も多い。ドイツ語による洒落や地口が通じにくいという障害の他に、笑いを生む「落ち」(Pointe) がずれている場合が多々あるからである。それはたとえば、日本語の非母語話者に「夢と機知を比較する際に、夢の作業を既知のものとして想定する」といった洒落が通じないのと同じことである。
- 18 引用部分が全文強調されているのは、フェヒナーのオリジナルがそうになっているからである。フェヒナーでは *Vorschule der Ästhetik*. S. 51.
- 19 単なる言葉の洒落や地口、語呂合わせなどではなく、何らかの内容的傾向をもっている機知を言う。フロイトが例を挙げて整理しているものには、「露出的な entblößend もしくは猥褻な obszön」機知、「攻撃的な aggressiv (敵対的な feindselig)」機知、「シニカルな zynisch (批判的な kritisch、瀆神的な blasphemisch)」機知、「懐疑的な skeptisch」機知がある。(Vgl. Ebd., S. 127f.)
- 20 機知論でフロイトは、特にハイネとリヒテンベルクから多くの例を引いている。
- 21 フェヒナーのオリジナルでは、Prinzip が Prinzip、eigentümlichen が eigenthümlichen であること以外、異同はない。

文 献 一 覧

- Barth, Thomas: *Wer Freud Ideen gab: Eine systematische Untersucheng*. Waxmann Verlag, Münster 2013.
- Buggle, Franz / Wirtgen, Paul: Gustav Theodor Fechner und die Psychoanalytischen Modellvorstellungen Sigmund Freuds. Einflüsse und Parallelen. In: *Archiv für die gesamte Psychologie*. Bd. 121, 1968. S. 148-201.
- Dorsch, Friedrich: *Psychologisches Wörterbuch*. (8., neubearb. und erw. Aufl.) Hrsg. unter Mitwirkung von Werner Traxel. Felix Meiner, Hamburg 1970.
- Fechner, Gustav Theodor: *Vorschule der Ästhetik*. Breitkopf und Härtel, Leipzig 1876.
- : *Revision der Hauptpunkte der Psychophysik*. Breitkopf und Härtel, Leipzig 1882.
- : *Zend-Avesta oder über die Dinge des Himmels und des Jenseits. Vom Standpunkt der Naturbetrachtung*. 2. Aufl. Verlag von Leopold Voß, Hamburg und Leipzig 1901.
- : *Elemente der Psychophysik. Dritte unveränderte Auflage*. Breitkopf und Härtel, Leipzig 1907.
- Freud, Sigmund: *Gesammelte Werke. Chronologisch geordnet*. Imago Publishing Co., LTD, London 1941-51.
- : *Aus den Anfängen der Psychoanalyse. Briefe an Wilhelm Fließ, Abhandlungen und Notizen aus den Jahren 1887-1902*. Fischer, Frankfurt am Main 1962.
- Lohmann, Hans-Martin / Pfeiffer, Joachim (Hrsg.): *Freud-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Metzler, Stuttgart / Weimar 2013.

Wundt, Wilhelm: *Gustav Theodor Fechner: Rede zur Feier seines hundertjährigen Geburtstages*. Verlag von Wilhelm Engelmann, Leipzig 1901.

ジークムント・フロイト：『フロイト全集』、岩波書店。

福元圭太：「『精神物理学原論』の射程——フェヒナーにおける自然哲学の自然科学的基盤——」『西日本ドイツ文学』第24号所収、日本独文学会西日本支部、2012年、13-27頁。

福元圭太：「フェヒナーからフロイトへ (1) —— グスタフ・テオドール・フェヒナーの系譜 (6) ——」『言語文化論究』第33号、九州大学言語文化研究院、2014年、39-54頁。

ラプランシュ／ポンタリス：『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1990年（第8刷）。

Von Fechner zu Freud (2)

— Gustav Theodor Fechner und seine Genealogie (7) —

Keita FUKUMOTO

Als Fortsetzung meiner vorigen Abhandlung „Von Fechner zu Freud (1)“ möchte ich diesmal die Einflüsse Fechners auf Freud in Bezug auf die „Metapsychologie“ Freuds aus dynamischen und topologischen bzw. topischen Gesichtspunkten erörtern. Dabei spielt der Fechnersche Begriff „Schauplatzwechsel“ eine zentrale Rolle. Für Fechner ist der „Schauplatz“ des Schlafes oder des Traums im Gegensatz zu dem der wachen Vorstellungen ein anderer. Freud paraphrasiert diesen Gedanken Fechners folgendermaßen: „Der Traumvorgang spielt auf einem anderen psychischen Terrain.“

Für den Psychophysiker Fechner sind psychische und physische Erscheinungen zwei Seiten einer Medaille, und auch der menschliche Wille muss laut Fechner den strengen Gesetzmäßigkeiten der Physik folgen. Diesen psycho-dynamische Determinismus finden wir auch bei Freud, wenn er schreibt: „Ich habe mir schon einmal die Freiheit genommen, Ihnen vorzuhalten, daß ein tief wurzelnder Glaube an psychische Freiheit und Willkürlichkeit in Ihnen steckt, der aber ganz unwissenschaftlich ist und vor der Anforderung eines auch das Seelenleben beherrschenden Determinismus die Segel streichen muß.“ Freud schreibt auch, dass das Ich „nicht einmal Herr [...] im eigenen Hause“ sei.

Darüber hinaus spielt Fechners Begriff „Schauplatzwechsel“ auch für Freuds topologisches Model des seelischen Apparates eine wesentliche Rolle. Erst durch Fechners Konzept des „Schauplatzwechsels“ konnte Freud seine Theorie der psychischen Lokalität aufstellen und damit die drei „Instanzen“, d. h. das Unbewusste, das Vorbewusste und das Bewusste, unterscheiden.

Anhand von Freuds Schriften *Die Traumdeutung* (1901), „Zur Psychopathologie des Alltagslebens“ (1901) und „Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten“ (1905) soll in dieser Abhandlung die Tragweite des Fechnerschen „Schauplatzwechsels“ auf Freuds topologisches Model des seelischen Apparats ergründet werden.